

青山通

岩野裕一

奥和宏

大石始

おおしまゆたか

大和田俊之

岡田暁生

川崎弘二

近藤譲(椎名亮輔

小鍛冶邦隆

卜田隆嗣

長谷川町蔵

波多野睦美

牧野直也

松生恒夫

宮田茂樹

輪島裕介

和田博巳

ジャンル無用の音楽言論誌!





●このファイルについて

本誌は『アルテス』電子版のPDFファイルです。 iphone、iPadでの購読に便利なEPUBファイルも配信しますので、合わせてご利用ください。 本誌の購読方法、読み方など詳細については本誌サイト「購読のご案内」をご覧ください。 http://www.artespublishing.com/dbook_artes/

ロゴ・デザイン:宮一紀 表紙イラストレーション:へびつかい 表紙デザイン:折田烈(餅屋デザイン)

ジャンル無用の音楽言論誌!

PILFX

SEP. 2013 CONTENTS

115

005	岡田暁生/新運動 見た! 聴いた! うそじゃない!――岡田暁生の音楽時評 ①音楽の神様は気まぐれ
010	宮田茂樹/新運動 ジョアン・ジルベルト〜ザ・ボサ・ノヴァ ①『ゲッツ/ジルベルト』とオデオン・ファン・クラブ
022	和田博巳/新運動 オーディオは音楽、音楽はオーディオ ①ビートルズはモノラルで聴け!
028	長谷川町蔵×大和田俊之/ 文化系のためのヒップホップ通信 ①2012年のヒップホップ・シーン(1)
043	青山通 / アルテス著者エッセイ 森田健作が「バッハ」を教えてくれた
048	牧野直也/新運動 越境せよ! 耳と眼、そして脳の旅 ①リマリックのブラッド・メルドー(その1)
072	松生恒夫/新運動 ドクター松生のPOPSカルテ ①40歳を過ぎてもスタイリッシュだったファブ・フォー
076	岩野裕一/特別レポート 音楽の理想と権力――平壌で体験した《第9》初演
088	波多野睦美/うたうからだ ④
091	大石始/まつりの島 La isla de carnaval ⑤リズムに熱狂する〈ねぶたの国〉の短い夏
104	輪島裕介 /カタコト歌謡の近代 ⑤人はなぜデタラメな歌をうたうのか?

奥和宏/アルテス著者エッセイ 99枚のレコードとの不思議な出会い

118 **おおしまゆたか**/アラブ、アイルランド、アメリカを巡る音楽の旅 ⑤ブリテン起源のうた2つ

125 **卜田隆嗣**/suara, macam2

⑤続・カーツと歌うヘルムズマン

131 川崎弘二/武満徹の電子音楽

⑤ミュジック・コンクレート「ルリエフ・スタティク」

144 **大和田俊之**/倍音と幽霊―ハリー・スミスのアメリカ

③「アメリカ民謡」とはなにか?

153 小鍛冶邦隆/新連載 Carte blanche

①音楽理論の歴史的パースペクティヴをめぐって

160 椎名亮輔/短期集中連載 特別インタビュー・近藤譲(作曲家)

「線の音楽は今」②

182 編集後記

185 奥付



見た! 聴いた! うそじゃない! — 岡田暁生の音楽時評

第1回 音楽の神様は気まぐれ

☆●岡田暁生

―――今月号から岡田暁生さんと細川周平さんがひと月交替で登場! 名うての音楽評論家であるおふたりに、新聞や雑誌には書きたくても書けなかった「とっておきの」音楽体験をシェアしていただきます。

音楽を一回かぎりの出来事に昇華させるのはなにか?

音楽の神様は気まぐれだ。予想もしていなかった場所に、突如として 降りてくる。定評ある音楽家のコンサートは、もちろん世評にたがわず うまいことはうまいのだが、「評判どおりであることを確認する」だけ で終わることも多い。予定調和的な音楽はあまり面白くない。アクシデ ントやハプニングやアングラ性こそ、音楽を一回かぎりの「出来事」に 昇華させるための、必須のスパイスであるとすら思う。

たとえば昨年、ウィーンで聴いたセミヨン・ビシュコフという指揮者によるウィーン・フィルの定期演奏会。ウィーンに着いた当日にこのコンサートがあることがわかり、プレイガイドの親父にダメもとでチケットがあるか尋ねてみた。すると親父はなにやらあちこちに電話をかけ始め、「いくらまで出せる? 200ユーロまで出す気があるなら、なんとかなるかもしれない」などと言う。「Yes」と答えると、やおら彼はコートを羽織り、ミニバイクに乗ってどこかに出かけて行ってしまった。こちらは狐につままれたような気分だ。しかし、たしかに20分ばかりす

7117X SEP.2013 010

ジョアン・ジルベルト~ザ・ボサ・ノヴァ

第1回 『ゲッツ/ジルベルト』とオデオン・ファン・クラブ Getz/Gilberto & ODEON FUN CLUB

文●宮田茂樹

―――音楽は、すぐに理解できるけれども他の言葉にして説明できないという矛盾した特性を持つ唯一の言語なので、音楽を創り出す者は神のごとき存在であり、音楽そのものは人知の最大の謎なのだ。

クロード・レヴィ・ストロース著 早水洋太郎訳 『生のものと火を通したもの』(みすず書房、2006)

1964年冬

東京オリンピックも終わり、世の中が落着きを取りもどした1964年冬、高校受験をひかえているというのに、僕はジャズ喫茶通いにウツツをぬかしていた。新宿の二幸裏にあった老舗の「DIG」はストイック過ぎて中学生には敷居が高かった。その点、靖国通りに面した「木馬」は内装もシックで、自分だけがエリートだと自惚れている(自称ジャズ・マニアの)お兄さんがたが蔑むような「軟弱モノ」と呼ばれていたレコードでもかけてくれるので、贔屓にしていた。

その「木馬」で突然『ゲッツ/ジルベルト』がかかったんだ。レコードの溝に刻まれた音が耳に届いた瞬間、デュン・デュン・デュン・デュンというスキャットとギターのコードが聞こえたその瞬間、僕はもうジョアン・ジルベルトの虜になっていた。なにかに優しく包まれ、慰撫され、特別な感覚が研ぎ澄まされた僕は身動きできなくなっていた。陶

オーディオは音楽、音楽はオーディオ

第1回 ビートルズはモノラルで聴け!?

文●和田博巳

一年季の入ったロック・ファンには、はっぴいえんどと並ぶ伝説的なロック・バンドとして知られるはちみつぱいのベーシスト、と言ったほうが通りがいいかもしれないが、いまもっとも信頼の篤いオーディオ評論家として、オーディオ誌や音楽誌で健筆をふるっている和田博巳さんを本誌連載陣にお迎えした。この連載では、ミュージシャンとしてプロデューサーとして、レコーディング現場での経験の豊富な和田さんに、録音・再生技術に着目した音楽とオーディオの楽しみ方をご指南いただこう。

ステレオは進歩の印?

ビートルズ・ファンならきっと一度ならず耳に(目に)したことがあると思う、「ビートルズはモノラルで聴け!」という言葉。それって本当なのか? ステレオ盤ではなくモノラル盤で聴くと、何かいいことがあるのか。今回はこの「ビートルズはモノラルで聴け!」という定説(?)について考察したい。

ところで、最初に言ってしまうと、ぼくはステレオ (録音) のほうが モノラル (録音) よりもいいと、長い間ずっとそう思ってきた。日本人 はみんなそうだと決めつけはしないまでも、高度成長期に青春を送った 団塊の世代は概ねそう思っているのではないかと。

というのも、60年代にホンダやソニーが海外に躍進する姿を見てきた団塊の世代のぼくたちは、技術は進歩するものであり、進歩はいいこ

文化系のためのヒップホップ通信

第1回 2012年のヒップホップ・シーン(1)

☆●長谷川町蔵×大和田俊之

――ライムスターの宇多丸さんや山下達郎さんに絶賛された名著『文化系のためのヒップホップ入門』(2011年、小社刊)のコンビが戻ってきました! この「通信」では前著のポイントを踏まえつつ、最新の動向を見たり聴いたり語り合ったりしていきます。まずは長谷川町蔵さんがゲストとして呼ばれた昨年末の慶應大学での講義を誌上で再現。2000年代のヒップホップに何が起きたのか、ふたつのポイントにまとめたあと、刊行後の2012年のシーンを振り返っていきます。

反・8ビート:アメリカに向かう、サウスのビート感 —— クラーベになったヒップホップ

大和田 今日は、年末恒例の「ヒップホップ・シーンの1年を振り返る」という趣向で長谷川町蔵さんと二人で話をしていこうと思います。ただ、ヒップホップについて知識のない人のためにも、前半は2000年代以降の流れをざっとおさらいしつつ、後半に2012年のシーンを振り返るという構成でいきます。

ヒップホップは1970年代末のニューヨークで生まれましたが、1990年代に入ると西海岸を中心にギャングスタ・ラップが台頭します。このとき「ギャング」のイメージについていけないファンが振り落とされたというか、聴くのを止めてしまった人が日本にもたくさんいました。ところが2000年代以降、もう一度サウンドがドラスティックに変化したことで、多くのファンがさらにもう一度ふるいにかけられた。「なんか

森田健作が 「バッハ」を教えてくれた

★●青山 通

一でウルトラセブンが「音楽」を教えてくれた』(アルテスパブリッシング)が話題の青山通さん。7歳のときに『ウルトラセブン』の最終回で出会ったシューマンのピアノ協奏曲を、7年かけて探しあてたエピソードは日本中のセブン・ファンの共感を集めた。そんな青山さんにはもうひとつ、テレビ番組とクラシック音楽をめぐる思い出がある。12歳で聴いてから探し続け、もしかしたら一生わからないかもしれないと思っていた音楽との40年ぶりの再会。低視聴率で打ち切られた青春ドラマに流れていたのは、思いもよらない曲だった――。



青山通『ウルトラセブンが「音楽」 を教えてくれた』(小社刊)

忘れ去られた青春ドラマ

1973年に放送された『おこれ! 男だ』という青春ドラマをご記憶の方は、どれぐらいいるだろうか。「よしかわくん!」で有名な森田健作の『おれは男だ!』ではない。『おこれ! 男だ』だ。青い三角定規の名曲《太陽がくれた季節》が主題歌のヒット作、『飛び出せ! 青春』の後番組である。しかしこの作品は、当時絶大な人気を誇った森田健作、石橋正次を2枚看板として鳴り物入りでスタートしたものの、全22話をもって9月で打ち切られてしまった。定番の「学園」ではなく「私塾」

越境せよ! 耳と眼、そして脳の旅

第1回 リマリックのブラッド・メルドー(その1)

文·写真●**牧野直也**

一一かつて鈴木 [アルテス] が編集を担当した『レゲエ入門』は会心の1冊だった。その著者・牧野直也さんは、この数年長大なジャズ論の書き下ろしに取り組んでいる。完成にはまだ時間がかかりそうなので、本誌の連載でその一部をご披露いただくことにした。最初の主題はピアニスト、ブラッド・メルドー。力のこもった映画/映像論を導入として、ルイ・マルからアイルランドへと話題は移り、そしてブラッド・メルドーへ。射程の深い思索と類のないスリリングな展開をご堪能ください。



ドクター松生のPOPSカルテ

第1回 40歳を過ぎてもスタイリッシュだったファブ・フォー

☆●松生恒夫

―― 数多くの著書やテレビ出演などをつうじて「心と体のデトックス」を提案してきたドクター松生が、愛してやまないポップスをテーマにお送りする健康コラムです。

ビートルズはなぜメタボにならなかったのか

2013年は日本にとっては「ビートルズの年」といえるでしょう。3 月にリンゴ・スターが来日。そして11月にはポール・マッカートニーの来日公演が予定されています。

それにしても、ポールもリンゴも70歳を過ぎてもスタイリッシュで 若々しいですね。ふたりとも、2時間以上にわたるパワフルなステージ をみごとにこなしています。

40歳のころのビートルズの写真を見てください。ジョン・レノンであれば『ダブル・ファンタジー』、ポール・マッカートニーは『タッグ・オブ・ウォー』、ジョージ・ハリソンは『クラウド・ナイン』、リンゴ・スターなら『ストップ・アンド・スメル・ザ・ロージズ』のころです。4人とも、意外とスリムなのです。とくに、ジョンとジョージはみごとなまでにスリムです。このころ、じつは4人とも菜食を中心とした食生活を送っていたのです。

現在の日本でも、菜食やマクロビオティクスなどが知られるように

音楽の理想と権力 -----平壌で体験した《第9》初演

文·写真●岩野裕一

――「歓喜の主題」を奏で始めたそのとき、ホールの空気がたしかに 熱を帯び、温かくなった――。今年3月、指揮者の井上道義氏が北朝鮮 の首都・平壌でベートーヴェンの《第9》を初演した。その公演に立ち 会った音楽ジャーナリストの岩野裕一さんに、北朝鮮でクラシック音楽 のコンサートを聴くという貴重な体験をレポートしてもらった。

朝鮮国立交響楽団による《第9》初演

「音楽に国境はない」

私たちは、あるときは心からの感動をもって、またあるときはきわめて無造作に、この言葉を使っている。

確かに音楽に国境はないし、音楽が鳴り響いている瞬間において、その場に居合わせた人たちの心がひとつに溶け合っていることは、ほぼ間違いのないところであろう。

だが、その輝ける瞬間の前後に連なる過去や未来において、人と人と が国境や国籍、あるいは文化の違いによって分断され、隔絶されている こともまた、紛れもない事実である。

私はことし(2013年)3月5日から9日にかけて、北朝鮮の首都・平 壌に滞在していた。指揮者の井上道義氏が朝鮮(民主主義人民共和国) 国立交響楽団とベートーヴェンの《第9交響曲》を演奏するのを、現地 で聴くためである。

7||17| SEP.2013 **088**

うたうからだ(第4回)

文●波多野睦美

いれもの

人はしょせん臓物の入った袋、という。

中年になり、さまざまな身体の変化に見舞われると、自分の体内にある臓物を意識せざるを得なくなる。あるとき、ふと訪れる不調は、ああここに心臓があった、ここに胃腸があった、と臓器の存在をこちらに強く感じさせてくれるのだ。

「歌い手さんは身体が楽器だからたいへんですね」とはよく言われること。だが、身体をまったく使わない職業なんて思いつかない。作業がどんな種類のものであっても、身体のどこかが道具であることに変わりはない。演奏家とは、楽器とみずからの身体を道具として、音楽の媒体となる職業であり、歌い手の場合はたまたまその楽器が体内にあるだけなのだ。

道具なしでは?

空想の写真集がある。

いろんな職種の人が作業しているところ。

書をする人、人形を遣う人、画面をチェックする人、運転をする人、 陶器を作る人、接客する人、etc。

これらの人々から、衣類も含めていっさいの道具立てをとりはらった らどんなショットになるのか? 作業をする人の仕事中の「身体だけ」 が写った写真集。

まつりの島 La isla de carnaval

第5回 リズムに熱狂する〈ねぶたの国〉の短い夏

青森県県大川平の荒馬踊りと五所川原立佞武多

文●大石 始 写真●ケイコ・K・オオイシ

――ハードコア・パンクのライヴでダイブし、ダンスホール・レゲエやドラムンベースのパーティーで踊り続けていた筆者は、2010年に体験した二つの夏祭りに自らのアイデンティティーを揺さぶられ、そこから日本のフォークロアを巡る旅に出かける――。コロンビアから錦糸町河内音頭、高円寺阿波おどり、秩父夜祭りを経て、連載第5回はねぶたの国、青森へいざ。



夜空に浮かび上がる五所川原の立佞武多と囃子方

カタコト歌謡の近代

第5回 人はなぜデタラメな歌をうたうのか?

文●輪島裕介

一一「ウナギイヌ」たる「カタコト歌謡」こそが、じつは近代日本大衆歌謡の主流だった!? そんな視点から日本歌謡史をたどり直す本連載、これまでの4回ではバートン・クレーン、川畑文子、ディック・ミネ、トニー谷、ジェリー藤尾を俎上にのせてきた。今回はすこし横道に入り、「レコード以前のカタコト歌謡」に着目してみよう。

記念すべき電子版第1回は、これまでの時系列から離れて「特別企画・カタコト前史、あるいは人はなぜデタラメな歌をうたうか」をお送りしよう。と書きだしたものの、いくつかの事例と問題群がもやもやと中空に浮いている状態で、どこに転ぶかわからない。これまでの各回のように、話題を限定してある程度詳細に資料を紹介・分析するのではなく、断片的な事例を細かくつないでゆくようなスタイルにならざるを得ない。そういう先の見えなさもディジタル版ならではって感じでちょっといいじゃない、と思ってくださる読者がどの程度おられるかはわからないが、本連載ひいては本誌の今後の吉凶を占う意味でも、ひらめきと連想に身を委ねつつ進めてみたい。万が一破綻したところで少なくとも紙資源のムダにはならないし印刷コストもかからない。うむ、ちょっと気が楽になった。

99枚のレコードとの不思議な出会い

『アメリカン・ルーツ・ミュージック ディスクでたどるアメリカ音楽史』

文●奥 和宏

アメリカのルーツ・ミュージックのなかでもヒルビリー、オールドタイム、ブルーグラスといったストリング・バンドの系譜をたどったディスクガイド『アメリカン・ルーツ・ミュージック ディスクでたどるアメリカ音楽史』をアルテスパブリッシングからこの初夏に上梓した奥和宏さん。この本を書き上げた背景には、奥さんが大切にしているひとつのディスクガイド企画があった。



奥 和宏『アメリカン・ルーツ・ ミュージック ディスクでたど るアメリカ音楽史』(小社刊)

百軒店のロック喫茶が作ったレコードガイド

仕事の都合もあって、ディスクガイド本ならそれなりの数を集めては きたものの、ここだけの話、あまり熱心な読者とは言えそうにない。折 にふれて必要なディスクを参照するという辞書的な使い方が多く、一気 に全編を読み通したことはほとんどないからだ。

それでも雑誌にまで範囲を広げれば、『ブラックホークの選んだ99枚のレコード』という例外もある。この小冊子は製本がバラバラになってしまうくらいよく読み返した。

ブラックホークは、東京・渋谷の百軒店にあったロック喫茶である。 70年代初頭から77年頃までのブラックホークは、ほかではなかなか聴 けないような音楽ばかりかかる不思議な店だった。そのロック喫茶のレ

suara, macam2 音声いろいろ

第5回 続・カーツと歌うヘルムズマン

文●ト田隆嗣

――あるときは録音機をかついでアマゾンの川を下り、あるときは南の島でジャングルをトレックし、あるときは歌って踊る警官と国境を越え……文化人類学者のフィールドワーク珍道中はまだまだ続く。

Keluq ko ke dayah lah?

もっと上流へ行きたいが、小さな船外機付きの舟は調達できそうなものの、ちょうど焼き畑を始める時期で、しかも例年にない雨続き、乾季はもう終わっているのではないか、と心配する声もあるぐらいで、元気な男たちは連日、畑にかかりきりだった。村に船頭役を引き受ける人がいない。それでヘルムズマンに、どうせ暇なら、と声をかけてみたら、「まだ上へ行きたいってのか?」と彼はうんざりした顔で言った。ロングボートが積み荷満載で航行可能な最上流のこの村にやってきて、4日目の夕方だった。

彼にしてみると、とっとと帰りの荷を積み込んで速い流れを下り、今ごろはカーツ王国の都でくつろいでいるつもりだっただろう。だがそうはいかなかった。帰りの荷がまだ揃っていない。香木やイワツバメの巣、クマの胆石など、主要なものはしっかり集積されているのだが、いくつか重要な品目が欠けていた。

そのおかげで、暇を持て余している名歌手にいやというほど即興で歌わせ、録音しまくれたし、その多くが彼の母語以外を主として用いたものだったから、めでたい状況ではあった。外語でその場で歌詞をひねり

7117X SEP.2013 13:

武満徹の電子音楽

第5回 ミュジック・コンクレート「ルリエフ・スタティク」

文●川崎弘二

―――第1回「ミュジック・コンクレートの構想」からスタートして、 作曲家・武満徹の手がけた電子音楽とその周辺の動向を実証的にたどる この連載。第5回目では、武満にとって初の純粋な音楽作品としてのミュ ジック・コンクレート作品「ルリエフ・スタティク」を採りあげ、その 成立背景と構造に迫る。

芸術祭と電子音楽

黛敏郎が日本文化放送において制作し、1953年11月に放送初演された日本初のミュジック・コンクレート「ミュージック・コンクレートのための作品『X・Y・Z』」は芸術祭参加作品であった。黎明期の日本における広義の電子音楽は、芸術祭に参加するために制作された作品という側面もあり、「古き文化を保存し、新しき文化を昂揚する芸術祭の催しは国民を鼓舞し明日の建設のための力を養ふに足りる企て」*1であるという宣言と共にスタートしたこの芸術祭は、各放送局で「新しき文化」の象徴として制作された電子音楽の質を競う場としての機能も担っていたのである。

「X・Y・Z」が芸術祭に出品された1953年には、NHKにおいて制作された芥川也寸志「マイクロフォンのための音楽」などの作品も芸術祭に参加している。そして、翌1954年に日本文化放送は、松平頼則のテープ音楽「ラジオのためのプレリュード・カノン・アリア・主題と変奏」を音楽部門に、そして、ミュジック・コンクレートを援用した黛

倍音と幽霊――ハリー・スミスのアメリカ

第3回 「アメリカ民謡」とはなにか?

★●大和田俊之

一全84曲を収めて1952年にリリースされた『アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック』は、60年代のフォーク・リバイバルに多大な影響を及ぼし、90年代にはアメリカーナのルーツとして再評価された。97年にCD化され、現在も広く聴かれるこの『アンソロジー』には多くの謎がある。『アメリカ音楽史』でも知られるアメリカ文化研究者が、その編纂者ハリー・スミスが幻視したアメリカ=〈世界〉に迫る。

アメリカ民謡蒐集史

ハリー・スミスが1952年にリリースした『アンソロジー・オブ・アメリカン・フォーク・ミュージック』(以下、『アンソロジー』) ――この3巻6枚組のLPに収録されているのは、いうまでもなく「アメリカのフォーク・ミュージック(民謡)」である。では、その「アメリカ民謡」とは、具体的にどのような音楽を指すのだろうか。

アメリカの民謡を語るうえで最初に言及すべきは「チャイルド・バラッド」と呼ばれるフォーク・ソングのコレクションである*1。それは19世紀半ばにハーバード大学教授を務めたフランシス・ジェイムズ・チャイルドが『イングランド及びスコットランドのポピュラー・バラッド』(1882~98)としてまとめたもので、全部で305の詩=歌とそのヴァ

Carte blanche

第1回 音楽理論の歴史的パースペクティヴをめぐって

文●小鍛冶邦隆

一一これまで『アルテス』のFacebookページに3回にわたって掲載してきた連載コラムが、新連載として本誌に登場。「Carte blanche(カルト・ブランシュ)」とは、フランスでしばしば使われる言い回しで、署名入り白紙(carte blanche)に自由に書き込むというところから、制作者が主催者から一任され、自由なコンセプトでプログラムを組むという意味。作曲家・教育者としての立場から現代の音楽状況をめぐる諸問題に鋭くせまる。

『アルテス』 Facebook ページでの旧連載はこちら

第1回 「消費」としての音楽教育

第2回 音楽・社会・階級

第3回 音楽理論・音楽分析

前回(旧連載第3回「音楽理論・音楽 分析」の「理論と実践、理論と分析」の 節を参照)は、ケルビーニ『対位法とフー ガ講座』(拙訳、アルテスパブリッシング) に関連して、19世紀前半のヨーロッパ における音楽理論教育についてふれた。

今回は、ルネサンス以来の「対位法」



7117X SEP.2013 160

近藤譲[作曲家]

「線の音楽」は今――第2回

聞き手●椎名亮輔

―― 1970年代から「線の音楽」という創作手法で知られ、独自のポジションを築いてきた作曲家・近藤譲さん。昨年アメリカ文化・芸術アカデミーの外国人名誉会員に選ばれるなど、名実ともに日本を代表する作曲家としての名望を新たにした。長年交流を続けてきた椎名亮輔さんがその作曲法の秘密にせまる特別インタヴュー。全3回のうち2回目をお届けする。

1本の線からなる音楽

[承前――自分の音楽は基本的に] 本の線であり、たとえ2声や3声で書かれているように見えても、本質は変わらない。]

— ああ、そうなんですか、それは意外。でも、たとえばピアノとヴァイオリンを使って、それでオブリガートということもおっしゃっているんで、2本のようにも聞こえなくもない [CD『表面・奥行き・色彩』所収《冬青(そよご)》]。

近藤 うん、でもこれもひとつの意識ですね、オブリガートっていうのは。それは、あんまりオブリガートではなくなってきたものではあるんですが……。

— ちょっと違ってきている、とCDの解説にお書きになっていました。

近藤 ええ、でも基本的には同じなんです。たとえばモーツァルトのヴァ

編集後記

Why 音楽言論誌?

『アルテス』は「音楽言論誌」を看板に掲げていますが、「音楽」と「言論」がなぜ、どのようにして結びつくのかは、ぼくたちの創業以来のテーマです。

先だってミシマ社さんの「みんなのミシマガジン」でクラシック入門 講座を頼まれたときには、「クラシック音楽を聴くことは本を読むよう なものだ」という話をしたのですが、クラシック音楽にかぎらず、音楽 にはたしかに「読み方」があり、知っている「語彙」が増えれば増える ほど理解が深くなると同時に、聴く人の言語中枢を刺激するようなとこ ろもあります。はやい話が、音楽を聴くとその音楽について語りたくな る。だから、音楽について書かれたいろんな文章を読むことで、音楽そ のものについての理解も深化するし、音楽について語るスキルも身につ く。だから、アルテスが刊行している「音楽書」にはたしかな存在意義 があるし、どんどん買ってね、というわけなんですが、どうもそれだけ では「音楽言論誌」たる理由づけとして足りないんじゃないか、と最近 思うようになりました。

きっかけは、ある方と「ハーヴァード大学にはなぜ音楽学科があるのか」という話になったこと。アメリカのメジャーな大学のリベラルアーツ学部には音楽学科があるところが多いそうです。リベラルアーツとはまあ「教養課程」といいかえてもいいかと思いますが(ちなみにアルテスという社名もリベラルアーツのもとのラテン語「アルテス・リベラレス」に由来します)、アメリカではハーヴァード大学のような最高学府に入って、基礎教養のひとつとして音楽を専攻する学生がいる。つまり音楽とはたんなる感性にうったえる慰みものではなく、数学や言語学などと同じく、知性を磨くのに必要な素養としてとらえられているわけです。

作曲技術のひとつに「対位法」というものがあります。あるメロディの変化に応じて、別のメロディを組み合わせていく技術です。異なる複数のメロディを同時に聴きわけて、その変化に合わせてそのつど最適解を導き出していくのですが、プロの音楽家はそれを瞬時に即興的におこなうことができます。ようするに流れる時間のなかでおのおの自由に変化する複数のファクターを、個として活かしながら、よりよい全体へとまとめ上げる――なにやら経営の指南書にも出てきそうなテーマですが、そのためにもとめられる教養が数学でも言語学でもなく、音楽だというわけです。

どうも自己啓発書のような話になってきました。つまり、人が音楽について語りたくなる、読みたくなる、というのは、たんにその音楽についてより深く知りたい、というだけでなく、数をかぞえることやコミュニケーションをとることなどと同じように、人間らしく生きるために必要な基礎教養のひとつなのではないか、と思ったわけなんです。

音楽を語ることにかけてはそれぞれひけをとらない執筆者たちの言葉を、毎月、次から次へと浴びるように読めるしあわせを、これからみなさんと分かち合えたらと思います。● [木村 元]

出版活動の核に

『アルテス』電子版の贅沢な連載陣を(一部むりやり)ジャンルに分けると、クラシック、ボサ・ノヴァ、オーディオ、ヒップホップ、ジャズ、ポップス、古楽、民謡、歌謡曲、米ルーツ音楽、アイルランド音楽、電子音楽、音楽理論、現代音楽となり、次号以降これにソウル、ワールド・ミュージック、ボリウッド、西洋音楽史、邦楽などが加わります。めぼしいところではキューバ、アフリカ、MPB、J-POP、それにロックが見当たりませんが、いずれにしてもこれほど多岐にわたる音楽を対象とした音楽雑誌は(情報誌を除けば)これまでになかったはずです。なぜなら特定のジャンルに絞った雑誌じゃないと売れないから。このジャンルの壁は書籍にも言えることで、棚のどのジャンルに置くべきなのか明確な本のほうが営業的には「楽」です。

その壁を打ち破りたいという積年の思いをそのままキャッチフレーズにして2011年秋に創刊したのが『アルテス』でした。4冊作ってみて、僕らと同じように、地球上のありとあらゆる音楽に好奇心を持ち、それらの音楽を語る言葉を欲している方がたくさんいる、ということを確認できたのはとても心強いことでした。

2年も経たずして紙版から離れるのは悔しいことでもあるのですが (特集主義の増刊として不定期に紙版の刊行も続けるつもりです)、より 多くの原稿をペースを上げて、より少ないコスト (手間と経費) で、安 価にお届けするにはこれがベストの方法だと考えて、今号から電子版に 移行することとしました。

電子版の編集は初体験となりますが、紙という物理的な制限が外れたせいか、次から次へと書いてもらいたい人とテーマが湧いてきて困ります。まずは今発表している皆さんに2ヵ月ないし3ヵ月に1回のペースで執筆を続けていただくつもりです。

連載の多くはいずれ書籍という器に盛り直して改めて世に出していきます。その意味でこの雑誌『アルテス』はアルテスパブリッシングの今後の出版活動の核となっていくものです。スタンドから配信するメルマガ方式をとらず、ダウンロード形式で制作から配信・決済までを自前でやる、という無謀な決断をしたため、第1号の配信まで試行錯誤の連続でした。読者の皆さんにはご不便などおかけすることもあるかもしれませんが、どうか長期にわたってのご支援をお願いいたします。

そして、面白い!と思っていただけたら、この雑誌を存続させる価値があると思っていただけたら、ブログやツィッターやfacebookでぜひ回りの方に薦めてください。もちろんリアルでも。皆さんの"口コミ"を僕らは最も頼りにしています。● [鈴木 茂]

アルテス

2013年9月30日 初版発行

Web http://www.artespublishing.com/dbook_artes/

Twitter https://twitter.com/artespublishing

Facebook https://www.facebook.com/magazineartes

発行者 鈴木茂・木村元

発行・発売 (株)アルテスパブリッシング

〒155-0032 東京都世田谷区代沢5-16-23-303

http://www.artespublishing.com/

デザイン 折田烈(餅屋デザイン) http://www.mochiya.nu/

表紙イラストレーション へびつかい http://hebi.soragoto.net/

 ロゴ・デザイン
 宮一紀

 DTP
 浜田淳

Web制作 小濱海代

編集協力 公魚(渡邊未帆、高橋智子)、恵谷隆英

ISBN978-4-903951-72-0

※本誌に関するお問合わせはウェブサイトのフォームよりお願いいたします。

http://www.artespublishing.com/dbook_artes/contacts.html

※本誌に掲載されている文章、写真、イラストレーションなどの著作権はそれぞれの著作者に帰属します。本誌の内容の引用あるいは複製、転載など著作権に関わる行為については現行の著作権法に従って行なってください。また、本誌のご紹介、ご批評は大歓迎ですが、転載をご希望の際は上記のお問合わせフォームから弊社までご連絡ください。 ※本誌は原則として毎月1回配信します。